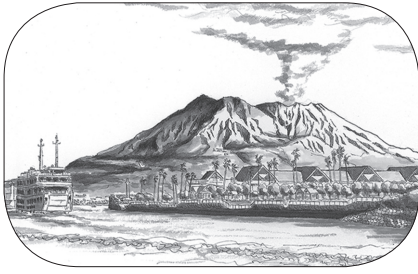


令和5年度

鹿児島県の教育

8月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部会長

鹿児島中央高等学校長
大脇俊朗

「ウエルビーイング」を高めていくために

令和五年に策定された、国の第四期の教育振興基本計画では、総合的な基本方針として、「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根ざしたウエルビーイングの向上」が基本コンセプトとして示された。外来語の「ウエルビーイング」がそのまま用いられたことには各論あるものの、この言葉が、今後の教育の方向性を考えるキーワードになる。

ウエルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を含む取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

と、本計画では説明されている。個人、社会が短期的、持続的に幸福であることを希求するのは、普遍的な営みであるが、何をもち「ウエルビーイング」とするのか、日本社会の価値観も含め、時代の変化を踏まえてつつ考察しなければならぬ。近年、AI等の科学技術が急速に進展し、対話型生成AIの利用の在り方が世界的な論点となった。学校においても、進化、普及する科学技術をいかに活用し、子供の情報活用

能力を高めていくかが問われている。その一方で、読書感想文などの課題の出し方、評価を工夫すること。論文等は自分の頭で考えて書くものであるという学問的誠実性を育み、遵守させていくことが必要となっている。

さて、デジタル技術の進展が「ウエルビーイング」をもたらす中で、実体験から得られる感動を言語化する力を高めていくことの重要性は、高まっていると思う。自分ががんばることで得られた感動の体験は、次の行動への意欲となる。また、読書を通して、文学作品に触れ、言葉により、想像を膨らませていくこと、人生への思索を深めていくことは、子供たちの内面形成に大きな影響を及ぼしていく。自らの思考や感性により得られた感動は、言語化されることで、自己発見や自己有用感となり、新たな思考、判断、表現へとつながっていく。子供たちの心にまかれた感動の種は、生涯にわたって育ち続けるものとなるのだ。

ウエルビーイングを目指していくために、私たち、地域、社会がよりよくあるとはどういうことか、幸福とはいかなるものか、感動体験を重ねつつ、言語化することで、確かな実感として捉えられるものとした。

令和5(2023)年 8月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



コンディション

日置市教育委員会社会教育課 飛松 佑輔
スポーツ振興係 主査

感染状況が終息に向かうにつれて、イベントの開催が戻りつつあります。年間を通してピークは二回ほど、十一月の大会に照準を合わせています。年度を締めくくる大会が鹿児島馬拉ソンです。鹿児島馬拉ソンもコロナ禍で三年間中止になっていた大会です。毎年、県下一周駅伝が二月中旬に開催され、約十日後に鹿児島馬拉ソンが開催されます。県下一周駅伝から鹿児島馬拉ソンまで期間は短く調整が難しいですが、駅伝のスピードが活かされます。そして、令和五年三月五日(日)四年ぶりに鹿児島馬拉ソンが開催されました。

日頃の練習は、早朝に八十分間十六〜十八km走ってから出勤しています。毎週水曜日午後七時から、県下一周駅伝日置チームがワークアウトを行っているのに参加しています。ワークアウトは強度の高いトレーニングやレース前の調整です。強度の高いトレーニングは、スピード持久力や心肺機能、最大酸素摂取量を高めるトレーニングです。内容は、ペース走やインターバルなど行い有酸素運動能力を高めます。レース前の調整は、本番同様のペースで走るか、それ以上のスピードで走り、感覚を覚えま

す。このような練習を行い、年間のピークを合わせます。

食生活は、朝食に時間がないときの強い味方、フルーツグラノーラを食べています。フルグラには不足しがちな栄養素が入っています。また、フルグラにかける牛乳のたんぱく質、ビタミン等も一緒に摂れて、朝食の強い味方です。必ず朝食は摂るようにしています。お昼は妻が作る弁当、夜も妻の手料理です。バランスを考えてくれますが、私の目の前でビールを毎晩飲んでいきます。たまに私もつられて飲んでいきます。お酒は、年間でピークを合わせる大会の約一か月前から禁酒をしています。

食生活を怠ると結果に出ます。特に馬拉ソンは。大体三〇km地点が馬拉ソンの壁で、脂質や糖質をエネルギーとして生み出し続けなければなりません。しかし、体内に蓄えられる脂質や糖質には限界があります。蓄える器を大きくしないとイケません。そのために、カーボローディングをする必要があります。カーボローディングは走るためのエネルギーの源である糖質を体内にたくさん蓄えるため、大会六〜四日前に糖質を多く含む食事を控え、三日前からご飯や

略	歴
二〇〇八年	二〇〇八年
二〇一四年	二〇一四年
二〇一七年	二〇一七年
二〇一七年	二〇一七年
二〇一九年	二〇一九年
二〇二一年	二〇二一年
二〇二二年	二〇二二年

二〇〇八年 県下一周市郡対抗駅伝出場 (一六回出場)
 二〇一四年 第一工業大学卒業
 二〇一七年 日置市役所入庁
 二〇一七年 鹿児島馬拉ソン四大会連続優勝
 二〇一九年 福岡国際馬拉ソン 十位
 二〇二一年 日置市教育委員会社会教育課配属
 二〇二二年 防府読売馬拉ソン 四位

パン、麺類を多く食べ、三〇km以降も走れる体づくりをします。

また、いかに早く糖質を体内に吸収できるかも鍵になります。運動中に糖質を摂取することでパフォーマンスが向上します。そのため、エイドステーションには糖質が多く含まれているスペシャルドリンクを置いてあります。

今年の鹿児島馬拉ソンのレース展開は、スタートして十km地点まで三人の先頭集団でしたが、十km以降一人旅のレースとなりました。重富の折り返し地点(二十五km過ぎ)で後続との差がわかります。思ったよりも差がなく若干焦りましたが、すれ違うランナーからの声援が力になり、後半ペースを落とすことなく力を出し切り、優勝することができました。

鹿児島馬拉ソン四連覇できたのも、ベストコンディションを大会当日に合わせられた結果だと思えます。そして、沿道で応援してくれる方々、ボランティアの方々、きつくて声も声もかいてくれるすれ違うランナー、テレビの前で声援を送ってくださる方々、この大会を運営してくださっている関係者の皆様、いつも支えてくれる方々、そして妻と娘に感謝しています。



「魅力ある学校」づくりの

自校化を通して

育英小(北) 釘本 隆 洋

一 はじめに

本校は、川内川の懐に抱かれた田園地帯にある。稲作を中心とした地域から都市計画区画整理事業により、町並みが整理され、住宅や大型店舗が建ち並び、商業地域へと変わりつつある。半径約2kmの校区には、水田や三つの池、川内川の豊かな自然、市の総合運動公園や歴史資料館、中央消防署等の行政施設や機関、児童公園が十か所設置され、教育環境に恵まれている。

二 「魅力ある学校づくり」について

薩摩川内市では、子供の「声」を基に教育活動を改善し、不登校の未然防止を始めとした課題解決に取り組む「魅力ある学校づくりプロジェクト」を推進している。各学校において、児童が「学校が楽しい・みんなで何かをするのは楽しい・授業がよくわかる」授業に主体的に楽しんでいると感ずるよう、子供の居場所づくり(安心・安全な学校)、子供同士の絆づくり(場と機会の設定)に取り組みている。学期ごとに児童の生の声として意識調査を実施し、教師の印象と児童の実態の乖離や必要不可欠な取組を検証することを通して、教師自身の意識改革、不登校の未然防止のための具体策を立案し、実践を進めている。魅力ある学級・人・授業・地域の四つの指標における本校の取組を一つの提案として述べていく。

三 「魅力ある学校づくり」への実践化

◎「魅力ある学級(居場所・絆の確立)」
始業前の校庭で学校全体で体力づくりを行っている。自分のペースで走る百周チャレンジや学級で取り組む長縄エイトマンである。

◎「一日一回いいことを」を合言葉に朝のボランティア作業に取り組んでいる。昨年、登録した青少年赤十字の気づき考え実行する精神を体現しようとして生活全般でできることを見つけて習慣も定着し一般化した。帰りの会では、ほめほめタイムを取り入れ、日直や頑張った子供を児童全員で称賛している。ほめてほしいところを的確にほめる高まっています。友達を意識することから自分自身を振り返り、相手意識のある言動が居心地のよい環境をつくりつつある。◎「魅力ある授業(子供が学ぶ・ICT)」
教科の特質を踏まえて、学習過程の中に自力解決一〇分、相互解決一〇分、まとめ

四

◎「おわりに」
本校の取組は、どの学校でも行われているもので特筆されるものではないが、今年度、新規の不登校児童はいない。本市の「魅力ある学校づくり」という取組に示されたことにより、学校全体で、組織で、個人で活動しやすくなったことは言うまでもない。魅力という人をひきつける力は、子供たち一人一人違うものであり、楽しさも多種多様である。学校生活における体験活動の楽しさや必要であるが、授業を通して学ぶ楽しさや、知る喜びを味わわせることのできる教師の授業力・人間力の育成に、力を入れていきたい。

◎「魅力ある地域(ひと・もの・こと、CS)」
青パト隊による毎日の登下校の見守り活動をはじめ、高齢者クラブの年間を通じた田植え体験や昔遊びによる交流活動、学校ボランティアによる授業支援(アール監視・学校の歴史紹介)等を行っている。ふるさとを取り入れ、地域住民や中学生等との体験活動(清掃活動や手紙の交流)を行ったり、地域の素材を調べたりすることを通して、ふるさと育英を愛する子供づくりに、年間を通して計画的に取り組んでいる。



初心に返る

手花部小(大) 松山 昭久

一 はじめに

社会はソサエティ5.0(超スマート社会)の時代に入っているようだ。世間ではチャットGPTが話題だ。GIGAスクール構想のもと、一人一台のタブレット端末が子供たちに手渡されたのが、令和三年度のことだった。一人一台端末は令和の学びのスタンダードであり、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、子供たち一人一人に公正に個別最適化され、資質・能力を一層確実に育成できる教育ICT環境の実現を目指している。あれから二年余が過ぎ、子供たちがタブレット端末を使う姿は日常になった。こうした流れは今後ますます広がり、速度を増していくことだろう。私も積極的に推進してきた。しかし、漠然とした不安も感じる。タブレット端末がよいものではないということではない。自分が、「もうついていけない」と弱気になる瞬間が増えてきているからである。年齢? いやいや、そんなことを言うのはまだまだ早いぞ、と言いついて聞かされている。定年が私の時には六十五歳になる。ただし役職定年は六十歳なので、六十一歳から五年間は「教諭」として教壇に立つ。むしろここからが本番だと考えている。とはいえ、教師を目指し初めて教壇に立った

あの頃の自分に、胸を張れる学級経営ができるだろうか。はなはだ自信がない。

二 ソサエティ4.0(情報社会)の頃

三十年近く前、当時はまだソサエティ4.0の黎明期の頃だったのではと思う。携帯もパソコンもデジカメも持っていなかった。初任一年目の始業式での担任発表。受け持ちのクラスの子供たちが、期待と不安とやや興奮したキラキラした瞳で見つめている。私も緊張でドキドキしながら、これから始まる子供たちとの学校生活に胸が高鳴った。その後、ぞろぞろと教室に戻り、子供たちは席に着き、私は黒板の前に立った。賑やかだった子供たちがしんと静かになる。私の言葉を待っているのだ。そこで私は、はたと気付いた。今から何をすればいいんだ? 何も考えていなかった。それからどのように学級開きをしたのか記憶がない。今思い出しても、冷や汗が出てくるほどに情けなく恥ずかしい。

当時は、生活科が始まり、次の学習指導要領で総合的な学習の時間が創設されることの話だった。「クロスカリキュラム」「横断的・総合的」といった言葉がよく聞かれた。私の勤めていた学校でも、「環境」をテーマに社会科や理科、家庭科などで発展の時間を使っ

て子供たちといろいろなことをした。ハンバーガーショップを回り、買ってきたハンバーガーの包装紙の量を調べたり、近所の川と山奥の清流の水質の違いを調べに行ったりと、やってみたいことは何でもやった。最後に子供たちが「フリーマーケット」を開きたいと言いつ出した。当然そんなに簡単にできるものではない。しかし、子供たちも私もあきらめなかった。土曜日の午後、学校で自分たちでフリーマーケットを開いた。思った以上に盛況で、出品した品物は全部売れた。ある男子が、「すごいね。先生、すごいね。」と、興奮で顔を赤らめながら言っていたのが忘れられない。私にとっても強烈な達成感だった。しかし、その後のバブル崩壊と二〇〇三年の「PISAショック」を契機に、社会も教育界も大きく舵を切ることになる。あの頃も、今と同じように激動の変化の中にあった。問題や課題は山積し、先の見えない中、右往左往し、試行錯誤を繰り返していた。

三 初心に返る

経験も浅く、実績もない、何ももっていない不安があるが、未知のもの、新しいものへの不安はなく、むしろ期待感の方が大きかった。古い殻を破り、新たな何かを創り上げていくのだという根拠のない自信と熱意があった。挑戦者であった。では、今は挑戦者ではないのか。いや、今でも挑戦者である。ソサエティ5.0の社会は、いずれソサエティ6.0の社会に変わっていくはずである。それも二十年かからないのではないだろうか。世の中はもっともっと面白くなっていく。息切れしている暇はない。



歴史と伝統、そして新しい谷山小づくり

谷山小(市) 長友 充 男

一 はじめに

かつては日本一のマンモス校で知られた本校も、令和五年度は児童数九〇一人の四〇学級、職員数七三人の学校規模となった。また、谷山駅周辺の都市開発が近年進み、以前の谷山を知る人に聞くと、谷山の街そのものが新しく生まれ変わったようだと多くの人が喜ぶ。一五四年の歴史と伝統を受け継ぎつつ、令和の時代と地域の変化に即した谷山小づくりを意識し、日々の学校経営に励んでいる。

二 共通実践事項「そろえる」

教育目標は、「自ら学び、心ゆたかな、たくましい谷山っ子の育成」、校訓は「進んで勉強 ゆたかな心 たくましい体」である。

市が提唱する「一校一改革」の取組として、ここ数年「そろえる」を全職員の基本的な姿勢として経営方針に示している。職員は指導方針、指導方法をそろえ、職員の一体感を生み出す。子どもははきもののかかとや、挨拶の仕方などをそろえ、心を磨く。大規模校の課題解決に「そろえる」ことは大変重要なことだと実感する昨年度の一年間だった。

三 通いたい学校、魅力ある学校に

本校の課題は不登校対策、特別支援教育の充実などである。特に、年間欠席が三十日を超える子どもが百人以上であった中で、相当数が完全不登校や登校渋りだった。学校あるいは学級に入れない子どもをいかに教室に帰すか。生徒指導や教育相談、特別支援教育の視点からその対処法の研究を進めている。

解決には、楽しくて魅力ある学校にすることが最も基盤となることである。そのため、授業力を高める研修の充実、自己有用感、居心地のよい学級づくり、学びに向かう力の育成が必要と感ずる。全職員が課題を共有し、強い危機意識をもって問題に向き合っている。

四 特色ある教育活動「大淀小との交流」

昭和三十年から続く、宮崎市立大淀小学校との交流が本校の最も誇りとする伝統である。コロナ禍においても、リモートによる交流方法に変更するなどして、この伝統は受け継いできた。大淀小の六年生が本校を訪問しての交流が唯一の対面交流ではあるが、両校

の子どもも卒業生も自慢できる行事であり、今後も発展させていきたい伝統である。

五 地域力を生かす

めざす学校像の一つに「社会に開かれた学校」を掲げる。本校を誇りに思い、まちづくりの拠点と位置付ける地域住民は多く、地域コミュニティ組織である通称「ふるコミ」は充実した活動を展開し、子どもの育成の視点からも頼れる支援組織である。学校外での子どもの教育活動の機会の提供はもちろん、各教科においては、外部指導者として地域の人材を提供してもらうことも多い。

公共の施設や商店街、各種の学校が近隣にそろっていることも環境としてはすばらしい。新しく開校した鹿児島南特別支援学校や私立高校などとの交流活動も、貴重な学習体験として子どもを成長させてくれるものと考え、本年度の教育課程に盛り込んだ。

六 おわりに

P T A の組織改編やコロナ禍を経ての教育活動の見直しなど、時代に合った学校経営の工夫を進めてきている。多くの学校も同様かと想像する。変革を進める上で最も重要なことは、職員一人一人の力だと考えているが、幸せなことに本校職員は、経験豊富で真摯に仕事に取り組む者ばかりである。能力差はもちろん多少はあるが、これをがっちり組み合わせ、一枚岩にするのが経営者の役割だと自覚している。今後も歴史と伝統を守りながらも、多くの職員と力を合わせ、新しい校風の創造に精進していきたい。



地元の子も留学生も 楽しく充実した学校生活を送れるように

大川小(熊) 山口 幸三

一 はじめに

本校は、種子島南部の屋久島と対面する西海岸に位置する。道路を挟んだすぐ目の前に大海原が広がり、その先には世界遺産の屋久島が姿を見せ、その景観が素晴らしい。校区は、南北に走る県道沿いに点在する四つの集落から成り立つ。

二 本校の現状と課題

現在児童数は十八名である。その内、地元出身の児童は四名、宇宙留学生在が七名、山村留学生在が五名、移住者の児童が一名、教職員の児童が一名である。

年度が終わると、三分の二以上の児童がこの学校を離れていく。そして、新年度になるとまた新しいメンバーが転入してくる。地元の児童にとつては、毎年新しい人間関係づくりが余儀なくされる。全国のいろいろな友達と出会えるという利点はあるが、毎年変わる仲間との人間関係の構築が大きなストレスになっていることは否めない。これは、地元の保護者についても同じことがいえる。

三 教育実践の三つの柱

(一) 小規模校のよさを生かす

本校は、完全複式の極小規模校である。児童に対する目が行き届きやすく、個に応じた対応が十分にできる環境にある。児童には様々な場面で活躍の機会が与えられる。その機会を生かし、充実感を覚えさせることをくり返し経験させることで、自信を高め意欲の向上を図りたい。

(二) 宇宙留學制度のよさを生かす

南種子町の重要施策の一つが「宇宙留學制度」である。今年度本校では七名の留學生を迎えた。全国各地から集まった留學生たちは、種子島の豊かな自然や体験活動を目当てにやってくる。学校では、留學生のニーズに合わせて、様々な体験活動を行っている。「サツマイモの栽培活動」「磯研修」「魚釣りクラブ」(海水を使った)「塩づくり」「ロケット打ち上げの見学」など。これらの活動は、本校ならではの特色ある活動でもある。留學制度があることが、地域の特色を

生かし、地域のよさを知る教育活動の充実につながっている。

(三) 地元の児童の育ちの充実

前述したように、本校は毎年三分の二以上の児童が入れ替わる特殊な状況にある。その中で、小学校生活六年間を過ごす地元の児童の育ちこそ重視すべきであると考えられる。地元の児童が、この特殊な状況を前向きに捉え、より主体的に教育活動に取り組めるようにしていきたい。

この地元の児童の成長は、本校の存続そのものにも大きく関わりと考える。「この学校で過ごしたい。」「この学校に預けたい。」と、児童と保護者が心から思えるような教育活動を展開していきたい。

四 おわりに

四月初め、多くの児童が入れ替わり、児童同士の繋がりが乏しい中でスタートを切ってから数か月。児童は、様々な教育活動を通して、人間関係を構築してきている。各学級での繋がりはもちろん、毎朝の一輪車の練習、昼休みの全校遊び、異年齢集団による集会活動や清掃活動を通して、年齢の壁を越えた繋がりが確実に育まれている。

一年間で本校を去る留學生の児童も、ずっと本校で小学時代を過ごす地元の児童も、「大川小学校は楽しかった。」「大川小学校で過ごせて良かった。」と思えるような学校づくりに努めていく。



「一人一人がかがやき、 共に学び合う子どもの育成」を目指して

岩南小(隅) 玉泉 克 将

一 はじめに

本校は、曾於市の南東部に位置し、児童数十一名、教職員数八名の極小規模校である。今年度、創立百四十七年を迎える学校で、校区民の学校への思いはたいへん強いものがある。そんな思いを教育活動に生かそうと取り組んできたことを本稿で紹介する。

二 経営の方針

タイトルのように学校教育目標を設定しているが、特に大切にしているのは「共に」である。子どもと子どもはもちろん、子どもと職員、子どもと校区民、そして、子どもと保護者など、子どもたちを取り巻く大勢の人の力を借りて、健やかに成長させたいとの願いを常にもっている。

三 取組の実際

(一) 校区民とのふれあい

グラウンドゴルフ交流では、一緒にプレーすることを通して、尊敬する心や感謝する心を培っている。終了後には、お茶やお花、

手作り小物入れをプレゼントし、おしゃべりし交流を深めている。

(二) 校区との合同運動会・発表会

一輪車演技やかっこ、合奏や劇などの発表を参観してもらうとともに、学校職員と児童の紹介タイムをプログラムに組み入れ、名前だけでなく、表彰されたことや得意なことなど、特徴的なことを校区民に自分の言葉で発表している。学校を知ってもらう絶好の機会と捉えている。校区民からも、職員と児童の名前がよく聞かれるようになり大好評であった。

(三) カヌースポーツクラブ

本校には、代々引き継がれてきた伝統としてのカヌーがある。全十一名の児童のうち十名が所属し、週二回ほど学校プールで放課後練習に打ち込み、曾於市や鹿児島県のカヌー大会に出場し好記録を残している。指導者は育成会、つまり保護者である。子どもの頑張りに称賛の声が掛かり、子ど

もと保護者とのふれあいにもつながっている。

そんな保護者の声に応えようと、また我が校の伝統を守ろうと、必死に頑張っている子どもたちの姿がたいへん頼もしく思えてくる。

(四) 地域学校協働活動

地域の人材を学校教育に生かそうと、学校評議員会や校区運営審議会で説明・依頼したところ、快く前向きに取組を進めてくださった。二か月に一回程度の環境整備、総合的な学習の時間における地域学習の講師、青少年育成の日における地域フイールドワークなど、数多くの提案がなされ、実施に向けて動き始めている。

四 おわりに

地域の中の学校、地域に支えられて成長する学校を目指して、日々の実践に取り組んでいる。本稿で紹介した取組を通して、地域のよさや校区民への感謝の思いを更に支えにして、子どもたちも一緒に成長していることを実感している。「学校応援団に感謝」(六年女子)、「地域の人と話した」(三年男子)の新聞投稿も校区民に好評であった。今後も校区民への働きかけを再考しながら、より深い関わりを求めて、子どもたち一人一人の輝きと自信と成長を目指して、学校経営を進めていきたい。



主体性を育む 郷土を思う心から

亀津中(大) 寿山 敏

一 はじめに

昭和二十三年創立の本校は、世界自然遺産に登録された徳之島の中央部にある。東には太平洋が青々と広がり、西には井之川岳(本島で一番高い山)の深い緑が映える豊かな自然に囲まれている。「結い」の精神を重んじるこの地では、地域や保護者の温かさを至る所で感じる事ができる。平成二十七年には現在の新校舎が完成し、新しい学び舎で学校生活を充実させている。本校学校教育目標には『亀津断髪』(積極進取)『ヤンキチシキバン』(子どもの教育に大人は労を惜しまない)という精神が含まれており、先人の教えを大切にしながらも、未来を見据えて教育活動を行っている。

二 取組について

本校では、奉仕作業やボランティア活動を通して生徒の自主性や郷土愛を育んでいる。学校行事として全校生徒が参加するものと、生徒たちが自主的に取り組んでいるものがあり、どちらも生徒のよりよき成長に役立っている。

三 学校行事としての取組

昨年度で十周年を迎えた『亀津中学校掃除に学ぶ会』では、三年生が、『徳之島トイレ掃除に学ぶ会』の方々の指導の下、校内のト

イレ掃除を行っている。自分たちが使用するトイレを素手で磨き、きれいにすることによ

つて感謝の心や達成感(感動する心)などを自然と身に付け、心を成長させている。一・二年生は、校外に出て地域の清掃活動を行っており、活動を通して地域に貢献できることを喜び、郷土を大切にすることが高まっている。

四 生徒会の取組

本校生徒会は、生徒会長を中心に、各専門部・委員会が学校行事等の企画や運営に尽力している。中でも『Vデー』と名付けられたボランティア活動は、特色ある取組である。

(一) Vデーについて

目的 世界自然遺産に登録された自分たちの島を、美しい状態で後世に残していく。

日時・内容 毎週水曜日の登校時、自宅から学校までの通路に落ちているゴミを拾う。



(二) 引き継がれるVデー

本活動は、生徒会が先輩たちから引き継いできており、発展を続けている。二年前は、この活動を地域全体に知らせたいと、生徒会が発案し、地元新聞社に依頼して記事にもらった。昨年度は、分別の重要性を全生徒で共通理解するためにゴミ箱を増やし、ラベルを貼り、分別に積極的に取り組んでいる。今年度の生徒会は、幅広くこの取組を体験してほしいと考え、校区内の小学校にてプレゼンを行った。結果、小学校からも賛同を得ることができ、小学生にもVデーに参加してもらうことができた。

五 おわりに



地域の方々(特に帰省した方々)から電話をいただくことがある。「中学生が登校時にゴミ袋を持ってゴミを拾いながら歩いている。微笑ましい光景である。」という内容である。

Vデーの説明をすることで、更に喜んでもらうことができ、こちらも嬉しくなる。生徒たちの優しい思いが伝わり、この島が美しいまま残っていくことを願い、この子たちが、どこに行っても主体性を発揮し、活躍してくれることを願っている。



「元気があれば何でもできる」

南方小(市) 今村 靖

運動が苦手だった私は、運動会や水泳大会のヒーローがうらやましかった。強い者へのあこがれがあった。最大のヒーローは、間違いなくアントニオ猪木だった。テレビの前で猪木の試合にくぎづけになっていたのを、昨日のことをように覚えている。最近では、難病を抱え、リハビリに励む生活に密着したNHKのドキュメンタリー番組が印象深い。痩せ、体力が衰えている様子は痛々しくもあったが、そこに見たのはまさしく最後まで闘う姿だった。猪木さんはいつも闘っていた。いつも明るかった。

猪木さんの名言には、表題の「元気があれば何でもできる」「迷わず行けばわかるさ」など、人々を勇気付けるものが数多くある。私

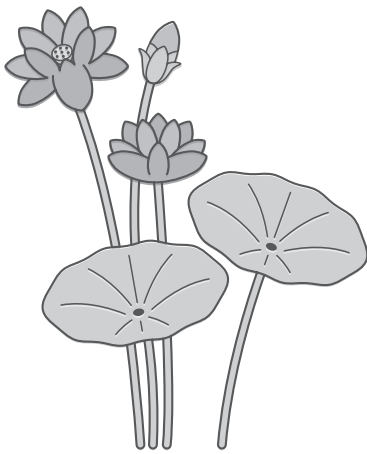
もこれらの言葉にどれだけ勇気付けられたことだろうか。

校長四年目、先輩の校長先生方から「学校運営を楽しめ」と言われ続けてきたが、その境地には、まだまだ至っていない。校長職のやりがいと楽しさを実感する瞬間は増えてきたが、同様に気持ち奮い立たせながら臨む瞬間も増えてきた。「元気があれば何でもできる」猪木さんの言う元気とは、単に健康という意味だけでなく、人間の内面的な気力という意味もあるのだろう。やる気であったり覇気であったり、その人に活発なバイタリティーがなければ、物事に対して積極的に取り組むことはできないし、周りを巻き込むための人としての魅力も伝わらない。

元気は出るものではなく出すものだ。

「元気を出せばなんでもできる」

「いくぞー、イチ、ニ、サン、ダー!」



熱が伝わっているか

建昌小(始伊) 坂 口 利 一

校庭で落ち葉を掃きながら、ふと胸をよぎる思い出がある。

二十代の半ばすぎ、鹿児島市の小学校に勤務していた。その時校長だったY先生は、教師としての姿や学校という場の在り方について自分の姿を通して、わたしの中に強い思い出として残る人である。

読書家であった先生は、幅広い知識や経験を基に、授業や学校経営について説得力のある語りをされた。

先生は、毎朝わたしたちより早く出勤し、作業着で校庭の清掃をされ、子どもたちに声を掛けるのが常であった。

ある朝、校長がわたしを呼んでいると同僚が知らせに来た。すぐに校庭に走っていくと、わたしの学級の鉢の前で、厳しい口調で

「子どもたちの花を見て何か思わんな?」

水が与えられず、元気の無い植物の姿があった。子どもたちと共に世話をすることをおろそかにしていた、というよりも、植物に心を配る気持ちをもっていなかったというのが本当のところである。

「一鉢も子どもの立派な作品じゃつど。子ども
の作品を大切にできない教員によか授業がで
きるはずがない。」

心に深く響く指導は、これまでの教師生活の
指針となっている。

やがて、先生が定年となり、学校を去られる
日がきた。引越越しを手伝うために、わたしは
教頭の A 先生を乗せ出水へ向かうことになっ
た。車中で、A 先生から

「先生が一番がられたな。校長は、教員生活
の最後だから、伝えておくことがたくさんある
と言つて、厳しく指導したとやつど。」

校長の発してきた熱は今も深く残っている。
人を育てることの難しさを、日々感じながら
経営に当たっているが、熱が伝わっているか試
行錯誤する日々である。

「教育の原点はへき地にあり」

黒神中(市)野村 浩 二

「教育の原点はへき地にあり」この言葉は、
九州地区へき地小規模校教育研究連盟の会議に
出席したときに、連盟の会長が熱く話された抜

擗の中の言葉である。

その話は、「へき地は『僻地』ではない。へ
き地は『碧地』である。へき地・複式・小規模
校のある地域には美しい自然があり、緑と太陽
がある。へき地は、ブルーに輝く美しい自然を
持つ『碧地』である。へき地は、美しい自然に
囲まれた教育の適地である。『教育の原点はへ
き地にあり』、へき地の三特性を生かした特色
ある学校づくりを展開しましょう・・・へき地
は体験活動の宝庫である。複式は、自ら課題解
決する力を育むゆりかごである。小規模校は、
個性を生かす大地である。へき地校・小規模校
は、その地域の顔として地域に根ざした教育活
動を展開していきましょう。」というものだっ
た。

三十数年の教職生活で、へき地校の勤務は三
校目である。現在の勤務校は、生徒数二人の準
へき地校である。へき地・小規模校としての様々
な課題と向き合っている。少人数であるがゆえ
にできないこともあるが、少人数だからこそで
きることは何か。また、少人数だからできない
ことをどう克服するか。そして、地理的条件で
難しいこともあるが、地理的特徴を生かして何
ができるかを。さらに、この地域だからこそで
きることは何なのかなどを、教職員一丸となつ
て考え、保護者や地域の方々との協力をもらい
ながら教育活動を行っている。

「教育の原点はへき地にあり」という言葉が
自然と心の中に入り、これからの学校経営、教
育活動の展開に向けて、元氣と勇気をもたらすこ
とができた。『碧地』の子どもの成長を見届け
ていきたい。

誰かが見ている

種子島中央高 青谷 有美代

種子島に赴任して二年目となる。十数年ほど
の行政での勤務を経て、校長職として初めての
勤務である。多岐に渡る業務、事の大小に関わ
らず常に判断を求められる重責が付きまとう。
この未知の世界をどう乗り越えていくか。そんな
思いに押しつぶされそうになっているとき、
ふと思いついた言葉がある。

「誰かが見ている」この言葉を新たな場所に
赴任する君に贈ります。」という手紙が届いた
のは、三十代後半、行政への異動が決まったと
きだった。共に勤務し、公私ともに多くのこと
を学ばせてもらった先輩からだ。突然の行政へ
の異動に「なぜ、どうして私なの？行政って何？
やっていけるの？」と不安は募るばかり。そんな

な私を察してか、丁寧な筆文字で書かれた手紙に穏やかで心温かい先輩の顔が浮かんだ。

『誰かが見ている』という言葉には二つ意味がある。一つは、任される役目に君自身は不安や不満があるかもしれないが、その役目は、誰かが君のことを見ている、この人なら任せても大丈夫と判断したから与えられたもの。誰だか分からないが、君を信じて応援してくれた方に恥ずかしくないよう力を尽くすこと。もう一つ。新たな役目では多忙かつ未経験の業務が続く。力を注いでも、報われないこともあるかもしれない。そんなときでも裏表なく誠実に役目に向き合うこと。必ずや誰か、時にお天道様かもしれないが誰かが見ている思いもよらず目に見えない力が働き、より深くより豊かな人生となっていく。

振り返ると、いつのときも周囲に助けられてきた。自分のことだけにいっぱいになっているとき、人は周りのことに無頓着になりがちだ。各々の業務に懸命になっている先生たち。青春の様々な思いを抱えながら毎日を生きている生徒たち。目をこらせば、私の周りにいる人たちの頑張りや息づかいが見えてきた。「誰かが見ている」私こそが、この学校の誰かにならなくてはいけない、いや、なれるのではないかと思っている。

ある日の校長講話



思いやりの心をもった人が

たくさんいる学校をつくろう

城川内小(北) 下野 由美子

皆さんおはようございます。新学期が始まって、あつという間に三か月が経ちました。あと二週間もすると、皆さんが楽しみにしている夏休みが始まります。今、皆さんは、それぞれの学級で担任の先生と一学期のお勉強のまともな頑張っていることと思います。一学期に習ったことはしっかりと復習し、分からないことを一つでもなくして夏休みを迎えられるようにしましょう。

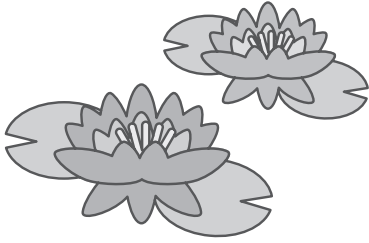
さて、校長先生は皆さんに「自分も周りの人も大切にできる人になりましょう。」「ちくちく言葉をできるだけ使わないようにして、ふわふわ言葉をたくさん使える人になりましょう。」というお話をこれまで何度かしてきました。皆さんは、一学期お友達にやさしい行動ができましたか。やさしい言葉をたくさん使えましたか。今日は、「思いやり」について考える、あるお話をしたいと思います。ある若いお坊さんがえらいお坊さんに「あの世には地獄と極楽があるそうですが、どんなところなのですか。」と聞いたそうです。するとえらいお坊さんが「どちらも見た目はまったく同じような場所だ。違うのは、そこにいる人たちの心だ。」と答えたそうです。えらいお坊さんが言うには、どちらにも同じような大きな釜があって、同じようにおいしそうなお飯がぐつぐつと煮えているそうです。ところが、そのうどんを食べるのが一苦労で、長さがメートルくらいもある長い箸を使うしかないのだそうです。こんな長いお箸です。皆さんだったら、うどんを食べられますか。なかなか難しそうですね。

地獄では、みんなが人より先にうどんを食べようとしますが、箸が長すぎて、なかなか食べることができません。しまいに人は人の取ったうどんを取ろうとしてけんかになり、誰もうどんを食べられず、飢えて痩せ細っているそうです。

それに対して極楽では、誰もが自分の長い箸でうどんをつかむと、釜の向こう側にいる人に「お先にどうぞ。」と食べさせてあげ、そうやってうどんを食べられた人も今度は「ありがとう。次はあなたの番ですよ。」と、お返しにうどんを取ってあげるのだそうです。だから、全員がうどんを食べることができ、みんな幸せに過ごすことができるというのです。

同じような世界に住んでいても、相手に温かい思いやりの心をもてるかどうかで、地獄にも極楽にもなるといってお話でした。

さて、皆さんはこの城川内小学校をどちらのような場所にしていきたいですか。先生は、この極楽のように、周りの人のことを考えて行動できる思いやりの心をもった人がたくさんいる学校にしていきたいです。皆さんの力で、城川内小学校をもっともっと素敵な学校にしていきたいですね。



自分たちの校区や町のことについて知ろう 意外と知らない身の回りにある文化財

内城小(大) 岩 戸 孝 夫

この前のことです。学校探検をしていた一年生からこんな質問を受けました。

「校長先生。校庭の端にあるコンクリートの建物は何ですか。」

二年生以上の皆さんは、分かりますか。そう奉安殿のことです。では、なぜ内城小学校の校庭には奉安殿があるのでしょうか。分かる人は、いますか。

奉安殿は今から八十年から百年くらい前に、奄美群島の全ての小学校に建設されたそうです。奉安殿の中には、天皇陛下の御真影や教育勅語という書物が収められ、全校児童で最敬礼する儀式が行われていたそうです。戦争が終わり多くの奉安殿は失われてしまいましたが、奄美群島全体では十二の奉安殿が残されています。内城小学校の奉安殿は沖永良部島では唯一残されたもので、和泊町の指定文化財として大切に保存されてきたのです。

和泊町には多くの指定文化財がありますが、内城小校区には奉安殿のほかにくつつあると思いますか。実は県指定文化財が二つ、町指定文

化財が三つあります。皆さんがよく知っている「世の主の墓」は県指定、「世の主の城跡」と「後蘭孫八の城跡」は町指定の文化財です。残り二つは皆さんで探してみてください。

このように皆さんの周りには、昔から受け継がれて大切に保存されてきたものがたくさんあります。それは、昔の人が未来の人のために誇りと時間をかけて残してきたものです。皆さんも地域や町に誇りを持ち、次の人に伝えてください。

内城小校区以外の文化財については、図書館や歴史民俗資料館など、町の施設で詳しく知ることが出来ます。また、文化財の場所にある案内板にも説明があります。今年の夏休みを利用して、校区や和泊町のことを詳しく調べてみましょう。きっと今まで知らなかった、新しい発見があると思いますよ。



「やれば、できる」より

「やったら、できた!」

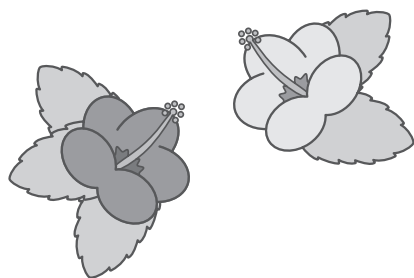
鹿大附属特支 水野 高明

いよいよ来週から二週間の現場実習が始まりますね。「楽しみにしている人」、「不安でドキドキしている人」、「よし、頑張るぞという人」など、様々ではないでしょうか。一年生の皆さんは今回は校内で実習します。二、三年生の皆さんは、学校を離れ、それぞれの職場や施設で実習を行います。初めての場所、初めて出会う人、初めてすることに対して、ワクワク、ドキドキと期待が高まることでしょう。一方で、いつもと違う環境にストレスを感じたり、不安になつたりすることもあるかもしれません。それは、先生たちも、皆さんの家族の方も、みんな同じように感じることです。当たり前のことなのであまり心配することはありません。皆さんのことは、実習先の方がしっかりと対応してくださるので、安心してください。

さて、現場実習に臨むに当たって、挨拶やコミュニケーションは最も大切であると学習しましたね。皆さんは、日頃の学校生活において、元氣よく笑顔で挨拶したり、友達や先生に積極的に話し掛けたりすることが、ちゃんとできて

います。また、友達と協力して作業を行ったり、頑張っている友達と互いに励まし合ったりするなど、人と接する中でできていることはたくさんあります。だから、自信をもって現場実習に臨んでください。もちろん、最初から無理をする必要はありません。新しい環境に慣れていく中で、少しずつ初めてのことにチャレンジしてください。「やれば、できる」と自分を奮い立たせることは大切ですが、小さなことでもよいので、実際にやってみて「やったら、できた」を経験するようにしてください。できている自分でできた自分を実感してほしいと思います。それが皆さんの成長に必ずつながります。それぞれの実習先で「やったら、できた」をたくさん経験してきてください。

二週間後、現場実習を終えた皆さんに会うのが、とても楽しみです。



話の
ひろば
あひ

はい! にこっ!

びよん!

寿北小(隅)

伊藤

太

私が、二十代の頃に勤務していたある町の教育長から教えていただいた言葉である。研修会での講話として、学級経営

の大切さをお話したのだと記憶している。学級目標について、「小学一年生の教室に掲げる学級目標は、例えば『素直、明朗、元氣』よりも『はい!』『にこっ!』『びよん!』の方が一年生には分かりやすい。実践化への工夫が大切である。」といった内容だったと思う。それから三十年ほどになるが、この簡単な三つの言葉が、私の中にとっても印象深く残っており、常に意識したい言葉となっている。

まず、「はい!」は、「いつも謙虚で素直でありたい」と捉えている。これまでいろいろな場所や立場で仕事をする中で、知らないことや初

めて経験することが必ずあった。また、よりよい仕事をするためには、他の人の意見を伺うことも必要になってくる。周囲の方々からの助言、指導を素直に受け入れ、謙虚に教えを請う姿勢を持ちたいと思っている。

「にこっ！」は、「何事にも明るく前向きな考え方で、取り組みたい」と考えている。京セラ創業者の稲盛和夫氏も、著書の中で「人生の成果＝考え方×熱意×能力」とし、「考え方とは生きる姿勢であり、考え方次第で人生や仕事の結果が変わる」と、その大切さを述べられている。前向きな考え方は、人生の中で重要なことだと心に留めている。

最後に「ぴょん！」。「元気でフットワークよく動きたい」と心掛けている。まずは、健康第一で軽やかに動き回りたい。そして、状況を確認した上で、考えたり話をしたりすることを大切にしたいと考えている。

しかしながら、この三つの簡単な言葉を実践することは、なかなか難しくもある。ついつい謙虚さを忘れた言動をしてみたり、忙しさにかまけて笑えなかったり、椅子に座り、パソコンの前から離れられなかったりと……。若かりし頃に教えていただいた、「はい！」「にこっ！」「ぴょん！」を、今日も心の中で唱えながら校内を巡回している。

地域一体となった

学校づくり

羽島小(日)

中川 辰也

毎朝七時から五分間ほど、学校近くの交差点で、校区駐在所の警察官の方、地域ボランティアの方々と一緒に、児童の朝の登校を見守っている。世間話をしたり、情報収集したりできる楽しいひとときでもある。

本校でも、子どもたちの朝の見守り活動を始め、学校の様々な教育活動において、地域の方々から多くの御支援・御協力をいただいている。稲作栽培における育苗から、田植え・稲刈り、餅つき大会。タマネギ栽培における植え付けから、収穫したタマネギを使つてのカレー作り。イモの栽培。また、地域の環境を生かした真鯛等の放流や海岸清掃、貝拾い、魚釣りにおける見守り活動など。子どもたちの教育活動に地域の方々の知恵と協力は欠かせない。コロナの状況下での数年間は、このような活動が十分実施できなかったが、今年度は以前のように計画どおり実施することができるようになり、改めて地域の方々の知恵と惜しみない協力に、心から感謝しているところである。

二〇二〇年からの学習指導要領の前文に、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るといふ理念を、学校と社会が共有し、社会と連携・

協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の理念が、明示されている。この理念の実現に向けては、組織的・継続的に、地域と学校が連携・協働していくことが大変重要であるが、本校においては、大変有り難いことに、これまでも、そして現在も、地域の温かい協力があり、連携・協働が伝統として受け継がれ、継続している。

価値観の多様化や少子高齢化、地域のつながりの希薄化による地域の教育力の低下が言われ、学校の抱える課題も複雑化・多様化している。昨今、地域で子どもを育てていくことが、ますます求められている。地域に開かれた学校経営を心掛け、地域の中の学校としての役割を再認識し、「みんなで作る羽島小」のスローガンの下、主体的に行動し、確かな学力を身に付け、豊かな心を持ち、たくましく生きる子どもへの育成に、今後更に地域一体となつて、取り組んでいきたい。



『生きる力』から

『生き抜く力』へ

鹿児島南高

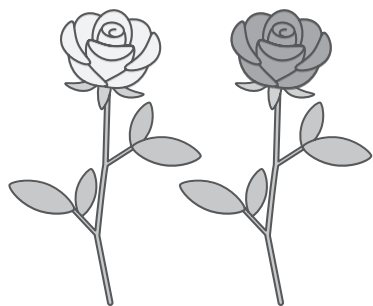
山口良人

県総合体育センター所長を拝命した三年間、新型コロナウイルス感染症が収まりそうでなかなか収まらず、いつまで続くのかとため息をつく毎日であった。準備していた事業等が次々と中止や延期になる中、感染症に関する本を何冊も読み、改めて考えたことは教育の役割についてである。教員（行政、教頭含む）として三十六年間を過ごし、感染予防・衛生管理は教育の中で保健体育が担うべき分野だと思い、保健体育の授業や部活動等を通して正しい知識を伝えてきた。そうして伝えてきた知識や経験が生徒たちの『生きる力』になっていると信じてきた。しかし、今回の未曾有の事態に対しては、これまで伝えてきた知識だけでは対応できないことを痛感させられた。

今後、私たちが児童生徒へ伝えなければいけないことは、これからの時代は想定外の連続であり、その中で自ら情報を収集し、正しく判断し、行動することが不可欠であるということである。正しい知識や情報がない状況は、無知からくる差別や偏見により、人を苦しませることに繋がる。教育現場こそが最新の情報や最先端の知識を伝え、自分を守り、周りも守れる人間関係づくりの砦とならなければならないと思

を新たにしている。時に私たちも、加害者になりうるという自覚を持って、児童生徒の前に立ち、自分が伝える知識や情報の中から、児童生徒自らが、必要であると思ったことについては、より多くの情報を収集し、自分なりの考えを持って行動するように促していく必要がある。その上で、学校が失敗を恐れることなく、行動できるような安心感のある場所になるように、私たちは努力し続けなくてはならない。

長い間、『生きる力』を育てることが教育の目標として掲げられているが、もはや『生きる力』では足りないと感じている。児童生徒だけでなく、その手本となる私たち教員も、どのような時代にも『生き抜く力』で乗り切っていくエネルギーを持つ存在でありたい。教育にはその可能性があふれている。児童生徒の素晴らしい未来のために、より一層精進してまいりたい。



読書案内



■高橋 伸治 著

奇跡の歯医者

桜丘東小(市)南 竜治

多くの子供がそうであるように、私も歯医者が苦手だった。歯を削るドリルの音や泣き叫ぶ声が待合所まで聞こえると、沈んだ気持ちになったものである。

本書は、香川県高松市にある歯科医院の、開業から現在までの足跡を綴ったものである。当然、治療も行っているが、注目すべきは、年間延べ一万四千人が定期検診のために来院するという点である。リピーターも多く、幼い頃に通っていた子供が親になり、家族で検診に通うケースも珍しくないという。作業衣やサンダル履

きのままで来る人もいる。

「俺たち歯科医は、患者さんの悪くなった歯を治す。また悪くなったら治す。これを何度も繰り返し続いたら、最後には自分の歯は一本もなくなる。引退する頃になってようやくそのことに気付くんじゃないか。」先輩医師との会話がきっかけで、筆者は「予防歯科」の大切さを伝えようと、トライ&エラーを繰り返しながら、「健康な人が訪れる歯科医院」への道のりを歩き始める。

挑戦から三十余年、治す側と治される側が同じ方向を向き、健康を共に喜び合える関係をめざしてきた。患者から学んだことは、健康づくりの主体はあくまでも患者本人であること。定期検診でセルフケアの成果を褒められた患者は必要性を初めて実感し、習慣化される。患者と医療スタッフとの信頼関係、院内の明るい雰囲気づくりなど、地道な積み重ねが「また行きたくない歯医者」を築き上げた。

地域とともにある歯科医院の実践には、学校経営、教育活動の充実に通じる要素も多い。多忙を極める皆様方、歯医者への待ち時間にも読んでいただきたい一冊である。

発行／サンライズパブリッシング
発売元／三恵書房 一六五〇円

■大場 秀章 著

牧野富太郎の植物愛

大口東小(始伊) 森 謙 次

学校の環境整備で剪定作業を行ったり、式典等で生けられた花を再利用したりする機会が増えた。切り落とした枝や生け花をそのまま処分するのは忍びないと感じ、挿し木をしている。挿し木がうまくいったとき、植物の生命力に感動している。そのような中、令和五年四月にNHK連続テレビ小説「らんまん」がスタートした。高知県出身の植物学者・牧野富太郎の人生をモデルとした作品である。日頃の生活とテレビ小説の影響もあり、富太郎氏の業績等について学んでみようと思ひ、本書を手にした。

富太郎氏は、植物の多様性を科学的に究める植物分類学の専門家として大成し、成果の一端である学名を通して今日の社会にも重要な役割を果たしている。富太郎氏が発見した植物の新種は一〇〇〇を超えるといわれている。富太郎氏は「似て非なる」かたちをした植物が多々あることに段々と気付くようになった。その後、そうした「似て非なる」植物を見つけては、それらを分別することに熱中した。さらに、富太

郎氏は、どんな困難な事に出会ってもこれを排して愉快にその方面へ深く這入り這入りして来て敢て倦む事を知らず、二六時中ただもう植物が楽しく、これに對しているると他の事は何もかも忘れて夢中になるのであったとある。(引用)

学校経営に当たり、富太郎氏の好きなもののため、夢のため、一生懸命に情熱をもち突き進んでいく・学び続ける姿勢と、生命力あふれる人生を、子供たち・職員へ機を逃さず伝えていきたいと考える。

朝日新聞出版 八一〇円＋税

■植松 努 著

「どうせ無理」と思っている君へ

本当の自信の増やし方

小湊小(南) 小山 俊 明

宇検村立田検小学校は、自分が教頭として赴任した年から文部科学省の指定を受けて、人権教育の研究に取り組んでいた。人権教育の研究を進めるにつれて、他人を大切にす気持ちを育てるには、自分を大切にす子供たちを育て

なければいけないという思いが、職員間で広がっていった。

ある日の職員研修で、「自分を大切にするには、自分に自信をもたせることが必要である。」ということが、話題の中心となり、学校でどのような取組を進めていくかを検討した。その日の研修の最後に、研修係をしていたM教諭が紹介してくれたのが、この本である。

著者の植松努氏は、北海道にある社員二〇名ほどの植松電機という小さな町工場の代表取締役である。植松氏は、小さい頃から飛行機やロケットが大好きで「いつか自分でロケットを作って飛ばしたい。」という夢をもっていた。周囲からの反対を受けても、「どうせ無理」とあきらめず、失敗を繰り返しながらも少しずつ自信を増やし、最終的に夢を叶えたのである。

子供たちには、自信をもって何事にも挑戦してほしいという思いから、自分が校長になった後は、全校朝会でこの本を紹介し、好きな箇所を読み聞かせている。

歩くことをあきらめる赤ちゃんはいない

赤ちゃんは転んだ自分を「かっこ悪い」と恥ずかしがったりしません。
「どうせ自分には才能がない」とがっかりしたりもしません。

「歩くのは向いていないからやめよう」とあきらめたりもしません。

頭からどてつと派手に転んだ赤ちゃんも立ち上がり、何度でも歩こうとするのです。

これが僕たちの本来の姿です。
君のもととの姿です。

君は、自信を持って生まれできたのです。
貴校の図書室にも一冊どうだろうか。

PHP研究所 一三二〇円

■林 健太郎 著

否定しない習慣

牧園中(始伊) 竹下 誠

子育て真っ最中の娘から、ニヤツと笑いながら「この本、読んでみたら？校長先生の仕事にも役立つかもよ。」と、勧められ、帯に書かれていた「否定をやめるだけで、仕事・人間関係は九割うまくいく。」という文字に興味を引かれて、本書を手にした。本書は、五章で構成されており、おおまかな内容は次のとおりである。人は無自覚に、ついつい相手を否定してしまっていることがある。もちろん悪気などなく、場合によっては相手のためにと思いつながら。しかし、そのことが、子どもの可能性を摘んでし

まったり、部下の成長を妨げたりする結果になることもある。欧米に比べて日本人には、その傾向が強い。人は否定されると心理的な安心が得られず、積極的にコミュニケーションを図ろうとはしなくなり、心を閉ざしてしまうこともある。信頼関係の構築や良好な関係づくりには、まずは相手を「否定しない習慣」を身に付けることが効果的である。否定しないことで相手との関係が安定し、自分の意図することも伝わりやすくなるため、仕事や人間関係もうまくいくようになる」と説いている。そして、そのための心構えやコーチングの手法等が紹介されている。

学校では、教師として児童生徒に、管理職として職員に、「指導」や「助言」を行う場面が少なくない。指導や助言にしても、言葉の使い方や相手の心の状態によっては、自分を否定されたと受け取られる場合もある。日々、熱い思いを持って学校経営に邁進されている管理職の先生方も、時には、子どもや職員との関係づくりに、悩まれることもあるのではないだろうか。本書を通して反省することや新たな学びが多かった私は、ニヤツと笑った娘の顔を「もっと精進しなさい。」という、ありがたいメッセージとして受けとめることにした。

フォレスト出版 一六五〇円

鹿屋市内の学校に教頭として勤めていた十年ほど前の日曜の朝。いつものように学校の安全点検で校舎内を巡回していたときのことだ。窓外に広がる高隈山(御岳)の頂上に立ちたいという衝動に駆られ、そのまま登山口まで車を走らせた。ペットボトル一本を握りしめ夢中になつて目指した山頂。これが、私が登山の魅力に心を奪われるようになったきっかけである。

それまで登山と呼べるような経験はなく、初任者時代に先輩の先生に誘われて一度だけ開聞岳に登ったくらいのもの。当時は、まさかこれが自分の趣味と呼べるようなものになるとは思つてもみなかった。何気なく眺めた景色に誘われてふらつと登つたあの日から、大隅半島や霧島の山々に出かけていくのが毎週末のささやかな楽しみとなつた。

私が登る山々は、家族連れでも行けるような低山中心である。だが、登る途中の辛さや苦しさは、殊の外大きいもので、何度もなくじけそうになる。併せて、うつそうと茂った森の中になつた一人という孤独感から、不安になつて引き返したくなることだつてある。(これまで実際に引き返したことも数回あったが…)それでも山頂にたどり着いたときの心地よい疲労感と何とも言えない爽快感、そして、これまでの自分の弱さを克服したような達成感は何物にも代えがたく格別なものだ。たとえ同じ山であったとしても登るたびに出合う自然の豊かな表情、山中の静寂、透明感のある

趣味・文芸

低山登山を楽しむ

空気は、心を落ち着かせてくれるものだ。

この山のすばらしさを周りの仲間にも感じてほしいと、転勤した学校では、「〇〇中学校登山部」と勝手にネーミングして職員にチラシを配つた。部活動のない日曜日。「わざわざ休みの日にきついことをしなくても…」「なんで山登りなの?」職員室の若干のアウェイ感が漂う中、なんとか五名ほどを説き伏せて私の趣味に付き合せてくれた。集団登山の日、若い職員は自宅で使っているカセットコンロとペットボトルの水をザックに入れてきた。突き抜ける碧空と眼下に広がる壮大な景色の下で食し

上小原中(隅) 寺田 洋二郎

たカップラーメン。あの味が忘れられないと一人で登山を楽しむようになった仲間がいる。また、幻想的な樹氷の景色をプレゼントしたくて、新婚の教え子夫婦を誘って積雪の韓国岳に登つたり、飲み過ぎと運動不足による体調不良を訴えていた同僚を登山に誘つたりしたこともあった。下山後に「感動した」「また誘つて」との言葉を掛けられ、登山の楽しさを感じてもらえたことに喜びを覚えた。

仲間とともに楽しむ登山も一人でするそれとは全く違う感じ方をするもので、それぞれに面白さがある。同じ目的をもって行動することで、

より親近感や一体感を感じ、登頂の喜びは倍増する。対して、一人で登る、いわゆるソロ登山は、先に述べたように自然の中に自分一人という非日常に浸りつつ登山を味わうことができるものだ。それぞれのよさを体感し、好きなように、気の向くままに、自然に身を委ねることが出来るのも登山のよさなのかもしれない。

ところで、人生はよく登山に例えられる。作家の吉川英治は、「登山の目標は、山頂と決まっている。しかし、人生の面白さは、その山頂にはなく、かえつて逆境の、山の中腹にある。」と述べる。目標に向かって、険しい山道を歩む苦しい過程こそが登山の醍醐味で、それは自分の人生とも重なっている。登山が多くなると、多くの人々を虜にする理由はそこにあるような気がする。

「登山なんて…」と思われている方へ。是非一度、近くの低山に登ってみることをお勧めしたい。登る前と後の自分では何かが変わっていることに気付かれるはずだ。奥深き低山の旅へ、ぜひ、足を運んでみてはいかがだろうか。

とは言ったものの、実は現在、私自身、病み上がりで山登りは休止中。ただ、今秋頃には再開したいものだと、高隈山を望みつつ毎夕のウォーキングを始めたところである。

皆様と、どこかの山で元気にあいさつを交わせる日を楽しみにしつつ。



特色あるPTA活動と

一園二校の連携

別府の子供は地域の宝もの

別府中(南) 真 茅 孝 洋

一 学校の概要

枕崎市立別府中学校は、昭和二十二年五月二日に開校し、本年度創立七十七年目を迎える。平成十六年度以降一学年一学級となる。今年度は五学級(二学級は特別支援学級)で、生徒数六十一名、職員数十七名である。現在の部活動は、野球部・男子ソフトテニス部・女子卓球部・女子バレーボール部の四つがあり、それぞれに活躍をしている。



【枕崎市立別府中学校】

校区は、枕崎市の東部に位置し、北に下山岳(四一六m)、北西部に国見岳(三九六m)が聳え、その麓から、なだらかな別府大地、前方には東シナ海が広がっている。また、眼下に名峰薩摩富士「開聞岳」を望み、太陽が燦々と照り注ぐ自然豊かな風土に恵まれ、その中央に本校が位置している。台地は南薩畑

地灌漑で整備された農地が広がり、亜熱帯性の気候により、枕崎市の特産物であるお茶やさつまいもなどの生産が盛んである。校区には史跡や文化財として「今嶽神社」、「田の神」、「鎌倉屋敷跡」がある。また、市の郷土芸能に指定された「駒水ヤンセ踊り」、「板敷棒踊り」などが、今でも地域で行われている。



【別府中学校から眺める開聞岳】

二 一園二校と連携したPTA活動

高齢化や過疎化が進み、近年、本校区の生徒数は年々減少している。そのため現在のPTAは五十三戸である。PTAは四つの専門部、学級PTA、地域PTAを三つの柱として活動している。

また、特色ある活動として、全世帯による朝のあいさつ運動と下校時の見回り活動、レクリエーション大会(同窓会球技大会や地域対抗親子バレーボール大会)、駅伝大会と一園二校連絡会等がある。また、小学校との連携を図り、小中PTA役員やおやじの会で、通学路の草払いや交通事故防止の立て看板等の整備をしている。

具体的な活動としては、「一園二校連絡協議会」の取組がある。校区は十二の地域からなり、生徒は各地域から通学しているが、通学距離の長い生徒もおり、交通量も多いことから、交通事故や不審者、声掛け事案等に生徒が遭遇することが心配される。このことから校区内のことも園と小学校、中学校で、「一園二校連絡協議会」という組織をつくり、総

会や合同教育講演会、スクールゾーン委員会、親睦会や教職員の合同歓迎会等を行い、幼稚園から中学校までの十五年間を見通し、校区全体で子育てに取り組んでいる。

また、地域と連携したPTA活動として、PTA組織の中に地域PTAがあり、公民館単位で子供がいない家庭も中学校の活動を見守り、資金の面からも支えていただいている。校区自治公民館連絡協議会、地区老人クラブ連合会、そして、PTAが世代を超えて子供の育成に取り組んでいる。さらに、恒例の行事として、ふるさとの歴史と伝統を学ぶために行っている「そまんずし(そばの雑煮)つくり」や伝統芸能「駒水ヤンセ踊り」の保存への協力、中学校同窓会による「球技大会」、「きばらん海総踊り」等、校区住民全員で郷土教育や地域の活性化に力を尽くしている。

三 まとめ

これまでのPTA活動の功績が認められ、令和三年に、日本PTA全国協議会「会長表彰」を団体で受賞している。

PTA活動は支援(一方通行)ではなく、連携・協働(双方向、対等)をキーワードに、地域の思いや願いを受け止め、協働することが大切である。また、このような取組は、ふるさと枕崎のよき伝統と教育風土を活用して「故郷を学び、故郷に学び、故郷に返す」地域に貢献できる子供を育成できると考える。今後も、別府地域や本校の伝統を生かしながら、PTA活動の活性化や会員の質の向上と和を大切にして、地域と連携して取り組んでいきたい。そして、今後も子供たちが地域の中で育っていることが実感できる「持続可能な社会の創り手」を育成していきたい。

人のために明かりを灯せば 自分の前も明るくなる。

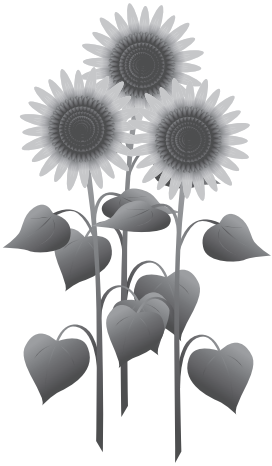
(日蓮 1222~1282)

人生の目標の一つは
世の中への貢献。
身近な場所を照らす
ことから始まる。



かごしま錦江湾サマーナイト大花火大会

©K.P.V.B



提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏

一般財団法人校長会館だより

〔県連合校長協会広報部からのお知らせ〕

「師の道」の原稿依頼について

「師の道」の原稿依頼について、今後数年、定年引上げにより退職の年が一年ずつ延びていきますが、校長会館が発行している刊行物ですので、校長職を終えられる校長先生方(六十歳)に原稿依頼をしていきますので、御承知おきください。

〔全国連合小学校長会より〕

全国連合小学校長会は、このたび、本会創立七十五周年を記念し、これまでの歩みや新たな時代の小学校教育への示唆に富む内容を折り込んだ「全国連合小学校長会 七十五周年記念誌」を刊行することにいたしました。ぜひともご購入賜りますようお願い申し上げます。

季節の言葉 「葉月」 はづき

二度目には 月ともいはぬ 葉月かな

小林 一茶

木の葉が紅葉して落ちる月「葉落ち月」
「葉月」であるという説が有力です。

編集後記



様々な課題を抱えながら始まった令和五年度も、すでに五か月程が過ぎました。これまでの学校経営を振り返ると、課題解決に向けて一歩ずつ前進しているかなともありますが、今後一層取組を進めています。それだけなら、思いがけず新たに加わった課題もありません。

残り七か月で一つ一つ課題を解決しながら、年度当初に掲げた目標とする学校像に近づけていきたいと考えています。子供たちが登校するよい機会になっています。子供たちが登校しているときには突発的な問題等が生じて、迅速な対応が求められることも多々ありますが、夏季休業期間は比較的長時間集中して考える時間を確保することができます。

この月刊「鹿児島教育」の中にも、現在本校が抱えている課題解決のヒントになる内容も多く掲載されています。

「この実践を取り入れるとよさそうだ。」「このような考え方が必要なんだ。」「こういう視点が自分には足りなかったんだ。」「と、気付きを与えてくださる原稿や、「これは、自校の参考になる。」と感じるページには毎月、付箋を付けて保管をしています。

この夏季休業中にもう一度付箋を付けたページを読み返してみました。間もなく始まる二学期の学校経営の参考にしたいたいと思います。

始業式に元気に登校する子供たちの姿を想像すると学校経営充実に向けたやる気も満ちてきます。

最後になりましたが、今月もご多用の折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に厚く御礼申し上げます。

平川了二(西紫原小学校)